



世界文学全集 8

エミリ・ブロンテ

嵐 が 丘

三宅幾三郎 訳

河出書房新社

世界文学全集 8 E・ブロンテ



© 1964

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和35年 4月22日 初版発行

昭和39年 4月20日 20版発行

定価 350 円

訳 者 三 宅 幾 三 郎
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 小 笠 原 秀 雄
装 幀 原 弘

印 刷：合資会社秀好堂印刷所
製 本：横田製本株式会社
本文用紙：日本紙業株式会社
同 納 入：東邦紙業株式会社
クロス：東洋クロス株式会社
同 納 入：株式会社石綿商店

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京 (291)3721~7

振替口座東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

嵐が丘

..... 一

年 譜

..... 四三

解 説

..... (阿部知二) 四七

『嵐が丘』年表

..... 四五

嵐
が
丘

主要人物

ロックウッド スラッシュクロス屋敷の借家人。

エレン・ディーン（ネリイ） ロックウッドの家政婦。もとア

ーンショー家の召使。この小説の語り手。

ヒンドレ・アーンショー 嵐が丘の主人。

フランセス・メアリ ヒンドレの妻。

ヘアトン・アーンショー ヒンドレ夫妻のむすこ。

キャサリン・アーンショー（キャシイ） ヒンドレの妹、エド

ガー・リントンの妻、ヒースクリッフの愛人。

ヒースクリッフ 幼い時、ヒンドレの父にリヴァプールで拾わ

れ、嵐が丘で人となる。この物語の主人公。

エドガー・リントン スラッシュクロス屋敷の主人、キャサリ

ンの夫となる。

キャサリン・リントン（キャシイ） エドガー夫妻の娘、ヒー

スクリッフのむすこと結婚、のちにヘアトンの妻となる。

イザベラ・リントン エドガーの妹、ヒースクリッフの妻。

リントン ヒースクリッフ夫妻のむすこ。

ジョウゼフ 嵐が丘の召使じいさん。

一八〇一年 —

家主を訪ねてきて、今もどったばかりだ——これからさき、近所づきあいしてゆかねばならぬのは、この男ひとりである。このあたりは、たしかに美しい土地だ。英国じゅうさがしたって、これほど世間の騒音からかけはなれた場所が、またと見あたろうとは思えない。人間きらいにとって、じつに申し分ない天国だ。しかも、ヒースクリッフ氏とわたしとは、このわびしさを分かあうには、おあつらえ向きの相棒だ！ まったくあの男が気に入った！ わたしが馬を乗りつけると、彼の黒い目が、いかにもうさんくさそうに、眉毛の下でいっそう奥深くひっこんだ。こちらが名を告げると、こんなやつに手をさしのべてなるものかとばかり、チョッキにつっ込んで

いた指を、いっそう奥深くかくすのだったが、このとき、この男にたいしてわたしがどんなに親愛の情をおぼえたか、おそらく彼には想像もつかなかったことだろう。

「ヒースクリッフさんですか」とわたしはいった。

相手はただ一つうなずいたきりである。

「こんどお屋敷をお借りすることになったロックウッドです。こちらに着いて早々おうかがいしたのは、じつは、スラッシュェクロス屋敷をぜひともお借りしたいなどとしつこく申して、もしやご迷惑ではなかったかと、おわびかたがたまいったようなわけでして。昨日耳にしたところでは、なんでもあなたのほうにも、何かお考えがあったそうで——」

「スラッシュェクロス屋敷はわしのものだ」と、彼はうるさそうに口をはさんだ。「やめようのない場合はいざ知らず、そうでもないかぎり、こちらの迷惑になることを黙ってさせたりするものかね——それより、中へはいったらいいでしょう」

この「中へはいったらいいでしょう」という言葉は、ろくに口もあけず吐き出すような言い方だったので、相手の腹の底では、「くたばりやがれ！」とでもいって

るように受けとれた。それにまた、この言葉に応じて、そのもたれていた門の扉をあけようとしなかった。わたしは、向こうがそう出るなら、こちらのかえって、相手の言葉どおりに中へはいってやるう、という気持ちが強くなった。もともとむつり屋のわたしにまだ輪をかけたようなこの男に、わたしは興味をおぼえたのだった。

馬が胸で門の扉をぐんぐんおしているのを見て、彼はじめて手を出して、扉の鎖をはずした。そしてむつりしたままわたしのさきに立って、土手のように盛り上げた道を歩いていったが、中庭へはいるとき、「おい、ジョウゼフ！ ロックウッドさんの馬をつれていけ。それからどう酒をもってこい」とさげんだ。

こうしてひとりの男に、二つの用事をたたみかけて命じているのを見て、わたしは、「はあ、この家はひとりしか召使がいらないんだ。道理で敷き石のあいだには草が生えているし、いけ垣も人が刈るかわりに牛に食わせてあるのか」と思った。

ジョウゼフというのはかなりな年輩の、というよりも、もういいおじいさんだ。ぴんぴんしていてたくましくはあるが、おそらくもうよほどの年であろう。彼はわ

たしの馬を受けとるとき、いかにも不愉快そうな低い調子で、「やれやれ神さま！」と口の中でつぶやいた。それからまた、とても苦い顔をしてわたしを見たようすから察すると、かわいそうにこのじいさん、胃が悪いので、屋敷がよくこなれますようにと神さまにおすがりしているのであって、ふいにわたしなんぞがやって来たのを迷惑がって、神のみ名を呼んだのではなさそうだった。

「ワザリング・ハイツ（嵐が丘）」というのは、ヒースクリップ氏の住居の名である。「ワザリング」というのは、大気が荒れ狂うことをいう、この地方独特の含みの多い形容詞で、嵐になると、この家は位置の關係上、それをまともに受けるのである。じいさい、この家の人たちは年じゅう清澄爽快な風にあたっているにちがいない。屋敷のはずれにijtけたように生えている数本の木、みの木のひどい傾き方、それから太陽に向かって恵みをこうているように、みんな同じ方向に枝を延ばしているわびしげないばらの木の列などを見ると、丘の背を吹き越えてくる北風がどんなに強いものか、たれにも想像はつく。さいわいに、建築家もその辺のことは心得ていたと見えて、家はがっちりできている。狭い窓は壁の奥深

く取りつけられ、家の角のところは突き出た大きな石でまもられている。

敷居をまたぐ前にわたしは立ちどまって、家の正面にいったいいついている奇怪な数多くの彫り物、ことに大玄関の周囲のものを感心してながめた。頭の上を見ると、たくさんのぼろぼろになった驚頭獅子体の怪物やまる裸の男の児の彫り物の中に「一五〇〇年」という年号と「ヘアトン・アーンシヨ」という姓名とが読まれた。

わたしはそのことについて何かすこし言ってみて、ぶちやうづらの主人からこの家の簡単な歴史でもききだそうかと思つたが、戸口での彼の態度がまるで、はいるなら早くはいれ、でなければささと帰ってもらおうとも言いたげだったし、それにこの家の内部も見ないうちに、癩癩をつのらせても困ると思つたので、そのままにした。

ひと足はいるともう家族の居間で、それまでに玄関の間も廊下もない。この辺ではこうした家族部屋のことをとくに「家」といつている。ふつうは台所も居間もふくんでいるのだが、この家では、台所はぜんぜん別なところへひっこまねばならなかったようだ。すくなくとも、人

のしゃべる声や台所道具の音は、ずっと奥のほうからきこえてきた。それに、大きな暖炉のあたりにも、いつかう物をあぶったり、煮たり、焼いたりした跡がない。また壁のほうを見ても、銅鍋やブリキの瀝過器などが光ってはいない。もっとも、部屋の方のほうには大きなオーク材の調理台があつて、その上に、銀の壺や大杯などもまじつて大きな白鐵の皿が幾段にも幾段にも、高く天井まで積み重ねてあつて、それが暖炉の光と熱とをすばらしく反射しているのである。天井は最初から張つたことがないらしく、目を上げればその骨組までまる見えで、からす麦パンや、牛の脚肉、羊肉、ハムなどをこつちやにしてのせた木を組んだたなで、その一部分がわずかにかくされているだけである。炉だなの上のほうには、いろんな古いぼろ鉄砲と、馬の鞍につけるピストル一対とが掛けてある。それから、装飾のつもりであろうが、三つのいやにけげばしい色をした茶の罐がたなのへりに並べてある。床はなめらかな白い石だった。いすは背中の高い旧式のもので、みどり色に塗つてあつた。そのほかに黒い重そうないすが一、二脚、隅のほうに片よせてあつた。調理台の下のアーチ形になつたところ

に、大きなこげ茶色の牝のポインターが、くんくんと啼くたくさんの子犬にかこまれて寝ていた。そのほかにも、隅っこのほうに犬がうろついていた。

こうした部屋や家具が、頑固そうな顔をして、そのがっしりした足には半ズボンやゲートルがよくうつる素朴な北国の百姓のものだとしても、べつだんなんのふしぎもない。食後のいいころあいを見計らって出かけていけば、この山間を五、六マイルもうろついてみれば、どこかの家でも、そうした男が、円いテーブルの上に泡だつビールの大杯を前にして、ひじかけいすに腰かけていることであろう。しかし、ヒースクリッフ氏には、その住居や生活様式とへんにつり合わないところがある。色が黒くて、ちょっとジブシーみだが、その身なりや態度は紳士である。といっても、その辺にざらにいる田舎紳士の程度ではあるが。どちらかといえば、だらしがないほうかもしれないが、元来が姿勢のいいりっぱな風采をしてるので、身なりはかまわなくても、そうへんなふうには見えないのである。それからまた、かなりむつつり屋のほうでもあった。人によっては、なんだか下品な傲慢さがあるのではないかと見るかもしれないが、わた

しには彼と気持ちに相通ずるようなものがあるせいか、けっしてそんなふうには思わない。彼がむつつりしているのは、感情をおもてに出したくないからだ——おたがいには好意を見せつけあうのがいやだからだ、ということが、わたしには直感的にわかるのである。彼は愛するにしても憎むにしても、自分の胸のうちだけにして、愛し返されたり、憎み返されたりすることは、一種の非礼と心得ているらしい。いや、これはわたしのひとり合点すぎたかもしれない。わたし自身の性質を彼にあてはめて考えすぎている。ヒースクリッフ氏が一方的に近づきを求める人間に出あったとき、敬遠的態度をとるについては、わたしなどとはまるで違った理由があるのかもしれない。このわたしのほうが人と一風変わっているのだ、と考えることにしよう。いつも母から、おまえなんぞは円満な家庭を作れる人間じゃない、といわれているくらいだから。そして事実また、ついこの夏、みごとにそれを証明してしまったのだから。

海岸で快晴つづきのひと月をたのしくすごしているあいだに、わたしはとてもかわいい娘と顔を合わせるようになった。向こうがまだわたしのことを気にもとめてい

ないあいだは、わたしの目には彼女がまるでほんとうの女神のようにうつった。わたしは口に出してはけっして恋をうちあけはしなかった。それでも、もし目が物をいうものならば、どんなばかでも、わたしが大あつたつだということがわかるはずだった。彼女にもとうとうそれがわかった。そして彼女のほうからも愛情こめてわたしを見かえすようになったが——そのまなざしのやさしさはたとえようもなかった。そのときわたしはどうしたか？　いうも恥ずかしいことながら——まるでかたむりのように、冷たく自分の殻（か）の中にひっこんでしまつて、彼女に見られるたびに、さらに冷たくさらに遠く身をひいていくのだった。だから、かわいそうにそのうぶな娘は、とうとう自分の判断に疑いをもつようになり、自分の勘（かん）ちがいだろうと思ひこんで、どうしていいやらわからなくなつてしまつて、けっきょく、母親を説いて、その海岸を引きあげてしまつた。わたしにはこんなへんなところがあるおかげで、故意にそんな無情な行ないをしたように人からいわれている。しかも、それがどんなに見当ちがいであるかは、わたしならでは知る者もないのである。

わたしは主人が近づいていった炉ばたの反対側のはしに席をとつて、しばしの沈黙をまぎらすために、さっきの親犬をなでてやろうとした。それは子犬たちのそばをはなれて、まるでおおかみのようにわたしの足のうしろにはい込んできて、口びるをつり上げるようにして、白い歯のあいだによだれをためて、いまにもかみついて来そうだった。わたしがなでてやると、かえつてウオーとひと声長くうなりだした。

「その犬にはさわらないほうがいいですよ」ヒースクリッフ氏は、犬がそれ以上はげしくいきりたつてこないように足でぽんとけりながらも、いっしょになつてうなるようにいった。「そいつは、甘やかされつけてはいないんだ——ちやほやするためには飼つてあるんじゃないんだから」そういつておいてから、彼はわきの戸口のところへ大またで歩いていつて、また「ジョウゼフ！」とさけんだ。

ジョウゼフは地下室の奥で何かぶつぶついつていて、あがつてくるけいも見せなかった。そこで主人が彼のほうへ下りていった。あとにはわたしが、残忍そうな牝犬と、二匹のこれもなんだかいかつい、毛むくじやらの

羊の番犬とさし向かいで残されたわけである。そして、羊の番犬は牝犬といっしょになって、わたしの一挙一動をゆだんなく監視している。わたしはあまりそいつらにかみついてほしくなかったので、じっとすわっていた。しかし、声にさえ出さなければ、少々ばかにしてやつてもまさかわかりはすまいと思ったので、その三匹の犬にむかつて、目をばちくりやったり、変な顔つきをして見せたりしたが、それがいけなかった。わたしがいろんな顔つきをして見せたうちで、よほど気に喰わないのがあったとみえて、牝犬が急に怒りだしてわたしのひざにとびかかってきた。わたしはそいつを突きとばしておいて、いそいでテーブルの中にはさんだ。これが蜂の巣をつついたような始末になって、大きいや小さいのや、年とったのや若いのや、いろんな犬が五、六匹、それぞれのかくれ家からとび出してきて、悪鬼のようにわたしをとり巻いた。何よりわたしのかかとや上着のすそを目がけてやってくる。大きなやつが飛びかかって来ると、火かき棒でできるだけうまくそれを撃退しながらも、この騒ぎをとりしずめにたれか家の人が来てくれるようにと、大きな声で助けを求めねばならなかった。

ヒースクリップ氏と下男のじいさんとが癪にさわるほどおちつきはらって、地下室の階段をあがってきた。暖炉のまわりでは、かみついたりほえたりの大騒動なのに、彼らはふだんより一秒でも急ぐようすもなさそうである。そこへさいわい、彼らよりもいち早く台所からかけつけてくれた家人があった。それはがっしりした婦人で、割烹着をはしより、腕をまくりあげ、火にほてったまっ赤なほおをして、フライ鍋を振り上げながら、われわれのまん中へとび込んで来てくれたのである。彼女のフライ鍋の振りまわし方と、どなり方とは、じつに手に入ったもので、まるで魔法でもかけたように騒ぎはしずまってしまった。そして主人がその場へやってきたときには、彼女だけが、強風のあとの海のように、胸を大きく波打たせながらつつ立っていた。

「いったい、どうしたというんです？」と主人はいつて、わたしのほうをにらむように見たが、犬にさんざんいじめられたあげく、こんなふうにならみつけれられては、わたしもさすがに腹にすえかねた。

「まったく、どうしたもこうしたも！」とわたしはつぶやいた。「悪魔につかれた豚の群だって、お宅の犬ど

もほど性悪じやありませんよ。これじや、はじめての客を虎とらの群といっしょにおいていってしまうのと同じじやありませんか！」

「なんにもさわったりしない人には、どうもしないはずなんだがね」と彼はいつて、わたしの前にぶどう酒のびんをおいて、テールを元の位置に直した。「犬が番をするのはつとめですからね。まあ、ぶどう酒を一ぱいどうです？」

「いや、けっこうです」

「かまれなかつたですか」

「かんだやつがあつたら、こちだつて火かき棒の跡ぐらいはつけずにおくもんですか」

ヒースクリッフ氏の顔がちょっとほころんで、にやりと笑つた。

「まあまあ、あんたは興奮していますよ、ロックウッドさん」と彼はいつた。「さあ、すこしぶどう酒でも飲むんですな。なにぶんわしんとこへはてんでお客がないもんだから、正直なところ、わしも犬どもも、お客のもてなし方というものがわからんですよ。まあ、あんたの健康を祝そうじやありませんか」

わたしは頭を下げて、こちからも彼のために乾杯した。そして、たかが、やくざ犬どもの無礼を怒ってふくれているのまばかしいような気がしてきた。そのうえ、この場の空気はどうやらそんなふうに変わつてきたのだが、こちらがむかつ腹を立てているのまで向こうにおもしろがられたのではたまらない。彼もしかし——おそらく、考えてみれば、せっかくの店子たなこを怒らせるのも愚かな話だとさとしたのであろうか——代名詞も助動詞も省略したようなぶつきらぼうな口のきき方をすこし改めて、わたしが興味をもつだろうと思う方面へ話をもつていつた、——つまり、わたしがこれから隠遁いんとんしようとする場所の長所短所についての議論をはじめたのである。われわれのふれた話題については、彼はなかなか頭のいいところを見せた。だからわたしも大いにはり合いを感じて、家へ帰つてみないうちから、明日も押しかけて来ようという氣になつていた。彼はあきらかにわたしがまたやつてくることを希望してないようすだった。それでもわたしは行くつもりだ。彼に比べると、このわたしでさえ交際家のような氣がしてくるのだからあきれたものだ。

二

昨日は午後になって、霧が立って寒かった。わたしはヒース（荒野）やぬかるみの中を風が丘まで苦勞して出かけていたりしないので、よほど書齋で火にあたっているかと思った。ところが、ディナー（正餐）をすましてあがってみると、（つまり、わたしは十二時から一時のあいだに正餐を食べるのである。というのは、家を借りるのといっしょに、まるでその備品みたいにして雇い入れた主婦然とした家政婦には、五時に正餐を出してくれというわたしの気持ちはどうしてもわからず、またわかるうともしてくれなかったからである）——とにかく、書齋でゆっくりしようというようなのんきなつもりで、階段をあがって、その部屋へ足をふみ入ると、女中がほうきや石炭入れにとりかこまれて、ひざをついてゐる。うず高い燃えがらのせいでせつかくの火を消してしまつて、ひどい灰かぐらを立てていた。それを見てわたしはさっそく退却した。そして帽子をかぶって、四マイルの長い道を歩いた後、やっとヒースクリッフ氏の庭の門に着いたが、そのときはじめて吹雪の前ぶれがちら

つきだした。だから途中で降られることだけは、いいあんばいにのがれたわけだった。

吹きさらしの丘のてっぺんでは、黒く凍^こつてついた霜で、土がこちこちだった。そして冷たい風はわたしの手足をふるえあがらせた。扉の鎖をはずすことができなかったので、飛び越えて、それから、だらしなくのびたすぐりの藪を両側に植えた、土手のようになった敷き石道をかけていって、玄關の戸をたたいて案内をこうたが、返事がない。しまいにこぶしは痛くなってくるし、犬までほえだした。

「この人たちはしようがないなあ」とわたしは心の中でさげんだ。「こんな失敬なぶあいそさじや、世間の人たちからいつまでも相手にされないぞ。すくなくとも、ぼくなら昼間から戸にかんぬきなんかおろしときゃしない。かまうことはない——はいっていつてやれ」そう腹を決めて、わたしはとつ手をつかんで、はげしくがちがちと動かしてみた。氣むずかしい顔をしたジョウゼフが納屋の円い窓から首を出した。

「何かご用ですかい」と彼はさげんだ。「だんなは羊小屋のほうですよ。もしだんなに話があるんなら、納屋を

ぐるっとまわっていきなせえ」

「家の中には戸をあける者もないのか」とわたしもすぐとなり返した。

「ミシス（奥さん）のほかだれもいねえだよ。おめえさまが晩までそんなふうにおそろしい音を立てていたところ、開けてくださるもんでねえ」

「どうして？ え、ジョウゼフ、おまえがおれの名をとりついでくれればいいじゃないか」

「おしゃいやだよ！ わしの知ったこつてねえだから」とつぶやいて、じいさんは首をひっこめてしまった。

雪はしきりと吹きつけてきだした。わたしはいま一度やってみようと、とっ手をつかんだ。そのとき、上着も着ないで熊手をついだ若い男が裏庭のほうに現われた。その男が、ついて来いといって呼んでくれた。彼について、洗濯場を抜けて、そこから石炭置場やポンプ室や鳩小屋はとこになっている石を敷いたところを通っていくと、とうとう、わたしが前にも通された、大きな、あたたかい、気持ちのいい部屋へ出た。そこは、石炭や泥炭でんたんや木などをいっしょくたにくべた大きな炉の火のぬくもりで、気持ちよくぽかぽかしていた。そして盛りだくさん

の夕餉ゆうぐの出ている食卓のそばには、うれしいことには、さっきじいさんが「ミシス」といった婦人がすわっていた。こんな女性がこの家にいようとは、今の今まで思いもかけなかった。わたしはおじぎをして、いまにお掛けなさいといってくるかと思って、待っていた。ところが、彼女はいすにもたれたままわたしを見ているだけで、ただじっとして口もきかないでいるのだ。

「ひどい天気ですね」とわたしはいった。「どうも、ヒースクリップの奥さん、おたくの召使たちは戸をたたいてもなかなか出て来ないようですが、あれじゃ戸がたまりませんよ。わたしも案内をこうのにずいぶん骨を折りましたよ」

彼女はまるで口をきかなかった。わたしがじっと顔を見ると——向こうでもじっとわたしを見ている。とにかく、彼女は冷たい無関心な態度でわたしを見つめているだけで、こっちはじつにばつがわるく、不愉快である。「お掛けなさい」と若い男の方がぶつきらぼうにいった。

「すぐに来ましょうから」

わたしはいわれるままに腰かけて、それからせき払い

をして、この前ひどい目にあわされた牝犬のジューノウを呼んだ。それでも二度めのこととて、顔を知っているというしるしに、しっぽのほんのさきだけを振ってくれる。

「美しい犬ですね」とわたしはまたいいだしてみた。

「あの子犬はみんなよそへおやりになるんですか、奥さん？」

「あたしのじゃありませんよ」とかわいらしい女主人は答えたが、そのつっけんどんな調子はヒースクリップ以上だった。

「ああ、あなたのお氣に入りはこっちにいるというわけですか」と、なんだかねこのようなものがのっている、うすぼんやりとしか見えないクッションのほうを振りむいて、わたしはいった。

「まあ、とんだお氣に入りだこと」と彼女はばかにしたようにいった。

まずいことには、それは殺したうさを積んであったのだ。わたしはもう一度せき払いをして、炬のほうへすこしいすをよせると、ひどい晩になってきた、というように天気の良いさをくりかえした。

「こんな日に出かけていらっしやるなんて間違ってますよ」と彼女は立ちあがりながらいって、手を伸ばして、炬だなから色塗りの茶のかんを二つ取ろうとした。

今まではその位置はかげになっていたが、こんどは、はっきりと彼女の全身も顔だちも見ることができた。ほっそりとして、見たところまだ娘ついても抜けきっていない。まだ見かけたこともないような、その姿のすばらしさ、たまらなくかわいい顔だち。顔は小じんまりとして、ひどく色が白い。あま色、というよりは金色にちかいまき毛がほっそりとした首にばらりとたれている。目は、表情さえやさしければ、人を魅了せずにはおかなかったであろうが、ほれっぼいわたしにとってはさいわいなことに、そこにはっきり現われていたのは、そんな美しい目にはおよそそぐわれない、冷笑的な氣持ちとでもいおうか、なんだか捨てばちな氣持ちとでもいおうか、ただそうした感情しかそこからは読みとれなかった。彼女の手はもうすこしのことで茶のかんへとどきかねた。わたしはそばから手を出そうとした。すると彼女は、まるでお金の勘定をしているとき、そばから手を出されたけちん坊みたいに、わたしのほうにふりむいた。

「取っていただくなくてもいいわ」と彼女はかみつくようにいった。「自分で取れますから」

「どうも失礼！」とわたしはあわてて答えた。

「お茶にお招びしてあったんですか」と彼女は、さっぴりとした黒い服の上にエプロンを結んで、それから急須に一さじのお茶の葉を入れようとして、立ったままできた。

「一ぱいごちそうしていただければけっこうですね」とわたしは答えた。

「お招びしてあったんですか」と彼女は重ねてきいた。

「いいえ」とわたしはすこし笑いながらいった。「あなたが招んでくださったって、ちっともおかしくはありませんよ」

彼女は茶もさじも投げ出すようにもとのところへおいで、怒ったようにまたいすにすわってしまった。額にしわをよせて、赤い下口びるを突き出して、ちょうど子供が泣きだすときのような顔つきだった。

一方その間に、若いほうの男はとも見すばらしい上着をからだに引っかけて、火の前に立って、まるでわたしにまだ晴らさない恨みでもあるかのように、横目でこ

っちをにらんでいた。わたしは、その男が召使なのかどうか疑いはじめた。身なりも言葉つきも粗野で、ヒースクリップ氏夫妻に見られるようなりっぱさがちっぽめなかつた。濃い、茶色のまき毛はばさばさで、くしも当ててなく、ひげは熊み^{くま}たいにほおまでいっぱいに生え、両手はまるでいやしい労働者のように日焼けしていた。それでいて、その態度にはべつに遠慮しているようなところもなく、いばっているといつてもいいくらいだった。女主人にたいしても、召使のように一生けんめいに仕えているようすもまったくなかった。そんなわけで、この男の正体をはっきりつきとめようがない以上、わたしは彼の妙な態度を氣にとめないのが一ばんだと思った。やがて五分ばかりたって、ヒースクリップがはいって来たので、わたしもなんだかへんな立場から救われて、いくぶんほっとした。

「約束どおりおじやましましたよ」とわたしは上きげんをよそおいながらいった。「それに、この吹雪じや、もう半時間ばかりは帰れそうもありませんよ、もちろん、その間ここにおいていただければの話ですが」

「半時間？」と彼は服から白い雪片を払い落としながら